

かがえる。第2段階でも、在宅時間が長くなったことで隣近所程度の地域の人との交流はむしろ増加し、それ以前から築いていた関係性をベースに、より親密な関係に発展させられたことをポジティブな変化として取り上げるケースが見られた。地縁によるつながりを保持しておくことが、「非常時」に有用であることを示す結果と言えよう。

一方、第1段階では、家族・友人や仕事といった対象との交流が断たれた場合については、「しらがみなくなる」ということが想定される程度で、十分な言及がされなかった。第1段階では、オンラインや在宅勤務などのいわゆる新しい生活様式に関わる具体的な変化がポジティブなものとして取り上げられ、それを歓迎する様子がうかがえた。しかしながら、同時に、コミュニケーションの弊害や帰省・行事など、従前にあった交流が断たれたことによるネガティブな影響も多く報告されており、多元的な対策の必要性が示唆された。

b)生活環境：第1段階では「人々が災害にリスクの少ない場所を選択して住む」ということが想定されたが、第2段階でも、密集リスクを避けて首都圏から地方への異動願を提出したという事例があった。一方、第1段階では、「草・虫・食べられる生物」「井戸水の水質・水量を調べる」といった「自給自足生活」への強い志向がうかがえた。第2段階では、買い物をまとめて行うようにした、避難用持ち出し品にマスクなどの衛生用品を加えた等、消費や備蓄行動への変化が見られた。

c)価値観の変化：第2段階では、他者の調和を乱す行動が気になりやすくなった、どうしても必要な外出を悪いことをしているかのように言われるというような、変化を巡る個人個人の価値観の違いに起因するネガティブな影響が報告された。ところが、第1段階では、「やさしさが伝わるふるまい・言葉・しぐさ・行動を学ぶ」「発信の仕方を考えておく」という程度で、個人個人の価値観や意見の対立について、どのように対処するかは具体的に想定されなかったといえる。

一方、第2段階では、自分優先で考えるタイミングが来たというように、個人個人の価値観が表出するようになった状況をポジティブに受け止めている回答も見られた。第1段階でも、「本当に向き合っている人とそうでない人が分かる」というように、変化において価値観が表出することをポジティブにとらえており、「積極的に「生きる」ための勉強」のような対策が提案されている。事象の性質上、今回、その対策の効果を測定することは困難であるが、バックキャストिंगによってより良く生きることに對して有用な防災対策を立案できる可能性が示唆されている。

3. おわりに

本稿では、バックキャストिंगによって立案された防災対策が新型コロナウイルス感染拡大という社会環境の変化において、有効であったかどうかを検証した。その結果、ポジティブな変化に対しては、バックキャストिंगにより立案された防災対策が有効である傾向が見られた。このことから、バックキャストिंगは通説での指摘どおり一定の有用性が示唆される。

一方で、第1段階で与えた条件を、災害時に発生するポジティブな変化を想定しての防災対策としたことにより、ネガティブな要素についての議論は排除されることとなった。これはブレインストーミング実施時の時間的制約のためであるが、ブレインストーミングは望ましい未来だけではなく、望ましくない未来を思考の出発点とすることも可能である² ため、条件設定を変更することで、より多元的で有用な対策を立案できた可能性がある。

また、南海トラフ地震を起点とした社会環境の変化を想定し、立案した対策について、新型コロナウイルス感染拡大という被害状況の異なる変化に対しての効果のみで、その有効性を検討することには疑問が残る。より普遍的な指標で、バックキャストिंगによって立案された防災対策の効果を検証することもあわせて今後の課題としたい。

¹ 西條辰義編著：フューチャーデザイン 七世代先を見据えた社会, pp. 60-61, 勁草書房, 2015.

² 西條辰義編著：フューチャーデザイン 七世代先を見据えた社会, pp. 69, 勁草書房, 2015.